

<随想>絵画と俳句：川端茅舎と正覚庵

著者	中嶋 秀子
雑誌名	日本文学誌要
巻	29
ページ	104-105
発行年	1983-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019380

絵画と俳句

——川端茅舎と正覚庵——

中嶋 秀子

正覚庵の書院で見た茅舎の素描画が、かなり西欧の画家達の影響を受けて、デフォルメされたものであることに驚いたが、もう一枚の画は、素描画とほぼ同型の質素な額に納められた小品で、油彩画であった。現在の東福寺内の道路は舗装されていたが、茅舎が逗留していた頃の東福寺は、まだ自然のままの道が通っていた。茅舎の画は、山門から塔頭へ向う参道を描いたものだが、両側にそり立つ杉の大樹が、黒々とした土の道をはさんで、遙か彼方まで緑を延べて、空の青に溶けこんでいる。その杉並木の参道を二人の雲水が、後姿を見せて歩いてゆく風景を、さわやかなタッチで描いている。鮮かな緑と、雲水の墨染の衣が静かな寺のたたずまいを感じさせる。格別これといった特色のない、茅舎の習作の一つであろう。すがすがしい印象と共に、どこかひ弱な印象を受ける油彩画であった。

川端龍子・茅舎兄弟の画才は、父親ゆずりのもので、二人には生れながらにして絵心がそなわっていた。

二人の父親、川端信吉は身上を傾けるほどの道楽者であった。日本橋で芸妓置家を営む信吉の身边には、あらゆるジャンルの芸術家

や好者の出入りが多かった。信吉自身も寿山堂の号を持ち、俳諧をたしなみ、書画にも優れていたようだ。

川端龍子が画家になったのも、幼い頃父親が、部屋の壁や入浴中に湯気を利用して即興で描く絵が大変楽しく気楽に思えたので、自分も描いてみようと思ったと懐想している。龍子は信吉の長男でありながら、事情があつて戸籍上で庶子の扱いを受け、そのことに強いショックを受けたという。又、龍子が早くから経済的労苦を負わされたのに対して、新しい母の許に龍子より十二年も遅れて生れてきた茅舎は、両親の愛を一身に集め、兄の愛情も受け、恵まれた少年時代を過したといつてよい。茅舎も父親ゆずりの画才をたのみ、龍子がすでに画家として自立しているのを見て、自分も同じ道を歩もうと志を立てたようだ。父親の願望は芸術家よりも医者の方に在り、彼を独逸協会中学を卒業させた後、一高理乙を受験させたが、茅舎はこの受験に失敗、おそらく生れて初めて挫折を味わった彼は、十七歳にして藤島武二絵画研究所へ通うようになる。大正三年のことである。

その後、茅舎は白樺派の文学者と交流を持ち、その影響も受けな

がら、正式に岸田劉生に師事し、劉生が突然の死を迎える昭和四年迄、茅舎は劉生の膝下で学んだ。美少年といっても良い風貌の茅舎は個性の強い劉生に大変愛されたという。茅舎が劉生の影響の下に画を描いたことは果して彼の資質にプラスになったかどうかは解らない。関東大震災の起る前後、ひんばんに京都へ出かけた理由の一つに劉生の存在があったことはいうまでもない。茅舎のナイーブな感性と澄んだ色彩感覚から推して、劉生に学ぶより日本画家に師事した方が自然だったのではないかと私は考えるが、どんなものであろうか。

ところで、日本画壇の大御所として長寿を全うした龍子は、洋画では生活が立たないとの理由で日本画に転向している。幼少時代から生活苦と戦って来た龍子は、少年雑誌の挿画を書くことで生計を立てて来たが、一応の成功を納めた後も、この挿画の仕事を安易には捨てなかったという。苦勞が骨の髄まで染みていたのであろう。

龍子は家族に対する愛情も責任感も強く、家庭人としても完璧なまでに努力したのは、父親信吉に対する生涯の抵抗であったかも知れない。茅舎が志半ばで病気に倒れ、独身のまま生涯を終えたのに対して、龍子は、父親、継母、弟の面倒を見続けたのである。庶子として扱われながら、これほどまでに自分の信念を完う出来たのは、宗教的なものへの深い帰依があったのではなからうか。正覚庵の庵主平住温州師は、信吉の友人島丈道しまたけやうどうの弟弟子であることから、川端兄弟の父親からの仏教的影響も重要視しなければならないだろう。茅舎は龍子ほどに仏教を体内に取り入れなかったが、信吉との生活から或いは正覚庵へ出入りすることから仏教的なものを次第に消化し、俳

句の中でこれを生かし、近代俳句史上に不滅の光を放っている。

前回ここで紹介した作品は、茅舎が画家としての道を中心に生きていた時のもので、どちらかといえば、余技的、月並的要素が強い。しかし、昭和四年、師岸田劉生の死に会い、病氣勝ちの日々を過すようになってからの作品は、異状な輝きを見せはじめた。

蟻地獄ありちごく見て光陰こういんを過すしけり

昭和四年八月「ホトトギス」発表の作品。光陰とは「光陰矢のごとし」のたとえのように、かなりの長い時間の経過を表す言葉である。或る日、この世の地獄を具象化したような蟻地獄を眼前にして、自分の過去・現在・未来がそこに収約されてしまったかのような不安と驚きを覚えたのだ。不遇な時代の影を濃く引いた作品であり、地獄・光陰といった抽象語から陰影の強い言葉を支える精神の緊張が感じられるのである。蟻地獄は夏の季語である。

昼寝ひるね比丘びくへき壁画がの天女てんによまひあそぶ

昭和四年九月号「ホトトギス」。比丘尼といえは尼、比丘といえは男の僧。昼寝が季語で夏ということになる。僧侶が一人、ほんの仮眠のつもりが、すっかり夢の世界へ入ってしまった。堂の壁、天井には、極彩色で天女の姿が描かれている。あでやかにも美しい天女が、熟睡する僧のまわりを、天衣をひるがえしつつ、良い香りを撒いて舞いはじめた。夢の中で出家の僧も、天女と共に恍惚境に酔いしれているに違いない。この句には、茅舎の心のゆとりが感じられ、前出の蟻地獄の句の持つかげりはない。仕事を放れた僧の寝姿と美しい天女の姿が対象的であり、明るく楽しい作品である。

(一九六三年卒)